

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿 9月14日（金）放送分

テーマ「奄美歳時記」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。県立奄美図書館です。今週のこの時間は，今年度第6回目の，シリーズ「奄美歳時記^{さいじき}」をお送りします。

「ミハチガツという八月踊りの季節。ガジュマルの陰^{かげ}深いミヤに夜ごとにツツミの音がひびき典雅^{てんが}な歌がきかれる。にぎやかな豊年祭りもある。家々の庭にサンダンカ（山丹花）の朱の花が咲きこぼれる。」

これは，小野重朗^{おのじゅうろう}の著書「南日本の民俗文化6 南島の祭り」での「かけろま島の年中行事 八月」の紹介です。

奄美大島では，季節の節目^{ふしめ}にさまざまな祭りが行われています。なかでも「ミハチガツ」は，旧暦8月の最初の丙^{ひのえ}・丁^{ひのと}の日を「アラセツ（新節）」，それから7日後の壬^{みずのえ}・癸^{みずのと}の日を「シバサシ（柴挿し）」，その後の甲子^{きのえね}の日を「ドンガ（嫩芽）」と呼んで，奄美が唄と踊りの渦に包まれます。

「アラセツ」は火の神の祭り，「シバサシ」は土の神の祭り，「ドンガ」は水の神の祭りとも言われ，その意義としては諸説あります。また，五穀豊穰を感謝・祈願する集落もあれば，火災防止を祈願する集落もありますが，集落をあげて「八月踊り」を踊りあかし，集落内の全員が平穏に暮らせるよう，神々に感謝を捧げ，祝福し合うことなのです。

奄美民俗研究家の文栄吉^{かざりえいきち}は，著書「奄美大島物語」の中で，「奄美の八月踊りは，秋の豊かな収穫を天地の神々と先祖に感謝し，部落と家々^{きよ}を浄めてその幸福を祈るといった『祭り』としての意義と，春から夏にかけての自らの労苦を慰め大いに歓楽をつくすという意図で行われるのである。そして時季そのものが最も『祭り』と歓楽にふさわしいときである。旧八月のミーニシがサラサラと黒潮の上を吹き渡ってくると，昨日の暑熱^{しよねつ}は新しい涼味^{りようみ}に席をゆずって，夜の月が一際^{ひときわ}冴えて美しく島全体が清められた祭壇といった感じだ。」と記しています。

「八月踊り」は、集落の広場(ミャーとかマーなどと呼ぶ神聖な場所)で人々が丸く大きな輪になり、「チヂン」と呼ぶ独特の^{くさび}楔 締め^{さば}の太鼓のリズムで男女の掛け合いの唄にあわせて踊ります。そのチヂンを叩くのは、ほとんどが女性です。そのリズムに乗り、男女が唄を交互に出しながら輪になって踊ります。テンポは最初はゆっくり、だんだん早くなって最後は手足がもつれるほどにまで盛り上がります。見た目には単調な踊りに見えますが、足捌き、手踊りは特徴的です。

唄は奄美の方言で綴られており、佐仁集落では、現在でも24曲の八月踊りが継承され、踊られています。その内容は、新築祝いの歌、奉納踊りの唄など様々です。他の集落でも、神々への感謝や祈り、社会風刺など、唄の内容は数多く、奄美の人々の豊かな詩情がうかがえます。

かつては家々を1軒ずつ回り、その庭先で「祝付け」の踊りを舞ったそうです。踊りの合間には、各戸が持ち寄った手作りの郷土料理とお酒が振る舞われます。集落の全員が、お互いの家に福を呼び込んで踊るということは、言葉を換えれば、「あなたの家に何か困ったことが起きたら、集落の皆が助けますよ」という保証を与えて回ることを意味しているのです。

今も根強く残っている、「^{ゆい}結」、相互扶助の精神そのものと言えます。そして、家の庭先やちょっとした広場、狭い裏通りなど普段の生活の場が唄や踊りによって特別な輝きを放つのは、神々に見守られた「シマ」の暮らしが、今も息づいている証拠かもしれません。

以上、県立奄美図書館でした。